

書 評

杉万俊夫編著 『コミュニティのグループ・ダイナミックス』

(2006 京都大学学術出版会)

山口 洋典

本書は、グループ・ダイナミックスという学問が、どのようにして現場の問題解決に貢献しているのかをまとめたものである。特に、コミュニティの変革に取り組む際には、研究者と当事者のあいだに一線を画してはならないことを、読者に訴求する。そして、グループ（人々とその環境の総体）のダイナミックス（動態）を研究する際、どんな主体がどんな対象にどのように接近するのかの理論的観点と、実践的研究の成果を示している。現場の改善に取り組む研究者らによって何が示されているのか、まずは本書の内容を見ていくことにしよう。

本文は、多様な価値が生滅流転する現場で研究者が当事者と共に相互作用を引き起こしながら問題に向き合う学問「グループ・ダイナミックス」の概括から始まる。グループ・ダイナミックスとは、ある環境において特定の性質を帯びた集団における、全体的性質の変化を取り扱う学問である。編者はこの全体的性質を「集合性」と呼び、集合性の動態を「集合流」(p.22)と命名する。そして、現場の集合流を研究することとは、ある集団が帯びている「多層的重複構造」(p.22)の変化を追いかけることだとまとめている。

第1章の前半では、グループ・ダイナミックスが学界においてどのような位置にあるのかの説明に多くのページが割かれている。端的に言えば、本書ではグループ・ダイナミックスを社会構成主義による人間科学という立場に拠る学問とし、論理実証主義に基づいた自然科学へのアンチテーゼであると示す。そして、実践的な学問だからこそ実証ということばを用いないこと、さらには現場に対する研究姿勢として「事実の観察を続けることによって言語への写し取

りを正確になものにしていくことではない」(p.26) 点に注意を喚起する。社会構成主義についてはGergen (1994, 1999) に詳しいが、山口 (2007) にも示したとおり、社会構成主義をメタ理論とするグループ・ダイナミックスでは、自然科学の知見で見いだされた物理的制約を踏まえつつ、われわれに現前する事実はいずれわれわれをとりまく関係性の産物であると捉え、それぞれにとってどのような事実と遭遇したのかの意味と意志を明らかにしていく。編者は、誰にとっての事実なのかが重要となることを示した上で、グループ・ダイナミックスの研究成果とは、無生物主語によってまとめられるものではなく、執筆者の人称がにじみ出る「人称的言説」によって紡ぎ出されたものと述べる。

これらの学問的背景の説明に続いて、編者らは研究者が現場の当事者と共にどのような実践を行っているかについて、5つの特徴を示している。第1に、実践的研究ではユニバーサル（普遍的）でなくローカル（局所的）な知識の探求を行うという「ローカリティ」が必要とされる。第2に、研究の目的や結論は価値中立的ではなく、現場から生成させようとする、あるいは生成した新たな学識は、現場の実践における「価値や目的」と不可分なものとなる。第3に、実践的研究は決して螺旋状には進展せず、現場で気づかざる前提に浸っている状態「一次モード」から新たな発見を終えて新たな気づかざる前提に浸っている「二次モード」への連続的交代運動の深化でしかない。第4に、時代を超えて真なる知が継承され続けるわけでないとする社会構成主義において、実践的研究の成否は、生々しい記録を少々抽象化して他の場所・時代に伝播する「インターローカリティー」を有してい

るかどうかによる。第5に、研究者が現場に没入して研究成果を紡ぎ出す際、一次モードが二次モードに、そしてローカルな知がインターローカルな知になるように、研究者は「理論」を道具として活用する。以上5点が11ページにわたって詳述されている。

いささか、第1章の紹介に分量を割いてしまった。しかし、第1章は上述した部分のみで終わらない。続いて、大澤（1990）が示す社会的身体論に基づく規範理論と、エンゲストローム（1998）による活動理論の解説がなされる。編者の表現を用いれば、前者は、集合流の観察において、見えない部分の変化を扱うものであり、「現在までを十分理解、納得する」ための「センス・メイキング (sense-making)」の理論であるとする。一方で後者は「見えるものを徹底的に見抜いて、それらをどうするか、次の一歩を定めていく」ための「デシジョン・メイキング (decision-making)」の理論であるとする。第2章以降では、これらの理論を用いて、鳥取県智頭町の地域活性化、京都市北区小野郷地区の無医地区医療、大阪府寝屋川市における学校を舞台にした新しい教育活動、愛知県名古屋市の拠点を置く災害NPOによる防災活動、そして予期せぬ妊娠に苦しむ母親の支援活動という家族に関する現場と、5つの分野の協働的実践の成果がまとめられている。

本書の特徴は、第2章から第6章までの5つの事例を通して、第1章で示した理論的観点に関する理解と、それぞれの章で取り扱われるコミュニティの問題に対する共感の双方を励起させていることにある。そこで、本評では、後半で詳述される事例についての言及は割愛し、杉万（2000）や楽学舎（2000）など、既刊の別稿とはどのような点が異なるのかについて述べることにしよう。

まず本書は、編者が上梓した他作にも増して理論と実践を架橋しようとする姿勢が強く見られる。研究者が実践からの理論化に精緻な関心を向けている例としては、協働的実践の成果物であるエスノグラフィーと実践的研究の成果であるセオライジングとを対にして論じた渥美（2001）などが挙げられる。しかし、本書は上述したとおり、研究者が理論的観点を道具として使いこなすことはどういうことなのかを読者に示してくる。ちょうど、プロの料理人が、道

具さばきによってどんな食材をも扱う様相に似ている。

また本書は、研究対象地の人々を第一の読者としつつも、他地域、他分野の研究者や当事者に対しても、実践の成果がインターローカルな知として収奪されることを願った記述になっている。このことは、特に17ページにわたって記された前書きの結語に、実践的研究の成果とは研究者と現場の人々の「合作」（p.16）だと示された点に端的にあらわれている。ところが、評者は本書を「臨床まちづくり学」の教科書として2年にわたって使用してきた中で、「日常生活で使うことばが専門用語として登場することに違和感がある」という感想を受け取ったことがある。そこで、渥美（2007）の「研究者言語と市民言語」という対比を用いて、評者なりにこのことを説明しておく、研究者言語と市民言語とが「同音異義」となっているために、混乱が生じてしまっていると考えられる。ゆえに、インターローカリティの高い実践知をローカルな現場に持ち込んでいく際には、持ち込む側に一定の「翻訳能力」が必要とされることが明らかとされていると言えよう。

加えて本書は、当事者と研究者の協働だけではなく、研究者間の協働によって紡ぎ上げられたものである。ただし、協働がなされた研究者は、編者を除いて3人とも、編者の指導する大学院生たちである。とはいえ、本書を通読すると、それぞれの章で執筆者が異なるものの、文体や論理展開、さらには理論という道具の裁き方に至るまで、極めて統一感のあるものとして仕上がっている。もちろん、それにあたっては編者から共著者への貢献が大きいことが容易に推察できるものの、それ以上に各々の共著者が自らの現場に対して積極的に貢献し、研究成果を公にすることに真摯な姿勢を持っているゆえに、統一感のある構成となっているのではない。すなわち、本書の執筆者は共通してインターローカル化への関心がそもそも極めて高いために、各々の事例をまとめたものに一定の緊張感が備わっていると考えてよいだろう。

末筆だが、編者の門下生で、第2章の智頭町の調査にも関わった森（1997）から、ある雑誌編集者による書評を書く時の心構えを聞いた。それは、(1)なるべくコンパクトに、(2)社会時評はいらない、(3)内容で時評を語らしめよ、(4)言

葉に酔うな、以上の4点だ。実はこの4つの心構えは、編者の目指す学問のあり方にも通じるのではないかと噛みしめながら、本評を推敲した。今後、本書が志向した、理論と実践の架橋、さらには研究者による理論という道具の使いこなしについて、現場への貢献という姿勢から、指導する院生らとともに成果を公刊したいと発意するところである。このような、研究成果の公刊という実践自体からのインターローカルなセンス・メイキングを導いた編者等に対し、僭越ながら労を多とさせていただきたい。

参考文献

渥美公秀『ボランティアの知：実践としてのボランティア研究』大阪大学出版会、2001年。

渥美公秀「研究をまとめる」(小泉潤二・志水宏吉編『実践的研究のすすめ：人間科学のリアリティ』有斐閣、2007年。

K. J. Gergen, *Realities and Relationships: Soundings in social construction*, Cambridge, Harvard University Press, 1994. (永田素彦・深尾誠訳『社会構成主義の理論と実践：関係性が現実をつくる』ナカニシヤ出版、2004年)

K. J. Gergen, *An Invitation to Social Construction*, London, Sage, 1999. (東村知子訳『あなたへの社会構成主義』ナカニシヤ出版、2004年)

森永壽「過疎地域活性化における規範形成プロセス：鳥取県八頭郡智頭町の活性化運動13年」『実験社会心理学研究』(日本グループ・ダイナミックス学会) 第37巻第2号、1997年、250-264。

楽学舎編『看護のための人間科学を求めて』ナカニシヤ出版、2000年。

杉万俊夫編『よみがえるコミュニティ：フィールドワーク人間科学』ミネルヴァ書房、2000年。

山口洋典「ソーシャル・イノベーション研究におけるフィールドワークの視座：グループ・ダイナミックスの観点から」『同志社政策科学研究』(同志社大学総合政策学会) 第9巻第1号、2007年、1-21。